物の怪日和

フサフサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
物の怪日和

【Ｎコード】
Ｎ３３４０Ｙ

【作者名】
フサフサ

【あらすじ】
頭頂部が薄くなってきた三十路間近の独身男、そのダメな日常、人生を赤裸々に駄弁る日記風小説です。

河童と言われムキになって反論したり。
むしろ認めてみたり。
妖怪臭を発する悪友どもと七転八倒したり。
男地獄に落ちて悶絶したり。
あまりにもふがいない人生に涙を流したり。

誰に対してしているかわからない自己弁護したり。
毛が抜けたり。

麒麟・天狗・河童

かつて麒麟児と呼ばれた子供がいた。

生まれた頃から頭脳明晰、小学校での成績は極めて優秀。
小学校の読書感想文では文部大臣賞を受賞したこともあった。
末は博士か大臣か、周囲の期待は極めて大きかったであろう。

中学に入ると麒麟から天狗に変化し、鼻高々のクソガキとなった。
同級生、教師構わず口論をし、そのことごとくを打ち負かした。
成績の方はというと、小学校の頃ほどではなかったが優秀といえた。
「ムカつくけど優秀」、というのが大方の評価といえた。

その天狗は、高校そして大学と進学をするにつれ、その高い鼻が邪魔をし勉強をしなくなっていった。
勉強時間の減少に比例し、それまでの優秀さはなりを潜め、成績は徐々にそして確実に地べたへと近づいていった。

彼は麒麟児の栄光を自分の中で守るため、更に天狗の鼻を雄々しく伸ばしていった。
しかし世の人々はそういう者を、「鼻持ちならぬヤツ」と呼び、特に付き合おうとは思わなくなる。
それでもなのかだからなのか、彼の鼻はどんどんと、そびえ、高くなっていった。
彼には過去の栄光、麒麟児という高名を、そう簡単には拭えなかっ

たのである。

「俺は普通の人とは違う。」
それは彼の心の呟きであった。

その天狗が就職した時は、俗に言う就職氷河期であった。
彼もそのあおりを受け、大学卒業が目前に控えても就職先は決まっていなかった。
確かに時勢もあったが、その高い鼻が何よりも邪魔をしていたのも事実であった。
彼は理想ばかりが高かったのである。
しかし彼は就職の決まらない辛さから、断腸の思いで天狗の鼻をバッキボッキと折り理想を諦めた。
そしてなんとか製造業を営む企業に内定をとりつけた。

しかし就職してからも、天狗の鼻は未だ彼の邪魔をしていた。
わかりやすく言えば、仕事が全くうまく運ばなかったのである。

バッキボッキと折ったといえど、普通の人に比べれば依然鼻っ柱は高かったのである。
当然上司には疎まれ、同僚とはソリが合わず、取引先ともうまくいかない。
社会の荒波に揉まれ、天狗の鼻っ柱は更にボッキボッキと折れていった。

月日は流れ、その天狗は日々総務で汗を流す三十路間近の男となった。
役職は緑化責任者代理補佐。
主な職務内容は、工場内の草木に水の散布。
分かり易さこの上ない閑職である。

プライドと現実の軋轢のせいか、それとも遺伝の法則か、その男は若くして頭頂部が薄くなり始めた。
このままずんずんと突き進めば、もう１０年も経てば立派な河童となるであろう。

古今東西、妖怪物の怪の類は数あれど、四半世紀ほどで麒麟、天狗と変化し、さらに河童となる例はそれほど多くはないと思われる。
いや、それとも麒麟は河童になる運命なのであろうか。
妖怪漫画の大家であっても驚嘆する事実に違いない。

さて、ここまで読み進めていただいた御仁には、その河童が私ということは自明であろう。
わかって欲しくないのが本音ではあるが。

果たして私は「普通の人とは違う」ということを、妖怪変化になることで証明してみせた。
しかし過去を振り返りそして現状を鑑みれば、「これならば普通の人がよかった」と切に思う。

更に追い討ちを掛けるかのように、私の近しい人々は妖怪変化、その片鱗を見せる者たちがやけに多いのである。
一体全体何故であろうか、妖怪同士はひかれ合う運命だ、とでもいうのだろうか。

狐・狸

物の怪どもの一例をあげる。

大宮、高島という女性2名の話をしよう。
2人とも当年とって20代半ば、という妙齢の女性たちである。

大宮は長身でスラッとした体型の女性である。
見ようによっては、モデルさんのように見えるかもしれない。
そして、キツネのような艶やかな髪の毛と、細いつり目が特徴的な女性である。

対して高島は、小柄で若干ずんぐりとした体型である。
そのフォルムは、背が低いというよりも、背が短い、といったほうがしっくりと来る。
そしてタヌキと間違えるほど、目の下のクマが濃い。
彼女と知り合った人は、ほとんどの場合ユーモラスな印象を受けるだろう。

女性をカテゴリー分けする無礼を承知で言えば、大宮は「綺麗な人」、高島は「かわいらしい人」と分類される。

さて、私が2人に出会ったのは今から半年前のことである。
ひどい出会い方をしたので、ことさら忘れられない過去といえる。

ある統計によると私の住んでいる町は、鉄鋼製品の生産量日本一とのことである。
そのため、鉄鋼に関わる大小様々な工場が多く建ち臨んでいる。
またそこに勤める工場職人を当てにしているのか、バーやスナック、居酒屋が極めて多い土地柄であり、ひいては酔客の一大産地でもある。

飲み屋に限らないが、同じ商売の店が多ければ、競争が激しいのはこの世の常だ。
まさに弱肉強食。
そして、熾烈な競争に勝ち残る手段として、酔狂なことをやり始める店も当然のように存在する。

そんな店の一つに、自然映像をでっかいモニタで流しているバーがあった。
壁には大きなテレビモニターが掛けられており、ゆるい音楽と風光明媚な景色を提供するのである。
酒だけでなく、癒しを提供するのがその店のとった営業戦略であった。

川のせせらぎ等を見ていると、とても心が安らぐ。
仕事で疲れた私には、大自然の雄大さが必要なのである。
オーナーも初老の男性で、数千年を経た屋久杉のような深い優しさと慈しみを感じさせる紳士であった。
そこは私にとってなんとも居心地がよく、すなわち好んで通いつめ

ていた。
私はオーナーの営業戦略、その術中に見事にはまったのである。

そのバーの名前はというと、「風光明媚」という。
おそろしくダサい名前であった。

そして、その「風光明媚」で、前述のキツネとタヌキとの奇縁が生まれてしまったのである。

半年前のその日、いつもどおり私は、バー「風光明媚」にいた。
マスターと話すわけでもなく、トマトジュースとビールのカクテル、レッドアイなんぞをチビチビと呑んでいた。
その時の私は、翌日から3日間の有給休暇をとっており、いかに有意義に過ごそうかと考えていたのである。
休暇の前日、社会人にとっては至福の時であろう。

そんな至福の時真っ只中、突如やってきたのがキツネとタヌキであった。

2人はなにやら私の聞いたことの無いカクテルを注文していた。
そして、出てきたそれを、ゆるゆると口に運びながら、モニターを見てぼーっとしていた。
今思えば、精神を開放していたのかもしれない。
仏教で言う空の心である。

しかし程なくして、どちらとも無く口を開き、会話が始まった。
年頃の女性らしく、恋愛の話だとか仕事の愚痴だとか、ともかく話のネタは尽きないらしい。

私自身の名誉のために言っておくが、私は聞き耳を立てていたのではない。
店にいるのは、マスターと私、そして今入ってきたキツネとタヌキだけである。
お世辞にも数は多くない、つまり話し声自体が少ない。
単純に彼女らの声が大きいので、嫌でも耳に入ってしまうのだ。

そして、不幸は突然運命を絡めとる。
ああ無常。

ここから先は身の毛もよだつ話であるため、箇条書きにて失礼する。
決して書くのが面倒だからではない。

画面にうつるキツネ。

タヌキがキツネに何かを呟く。

突如大声で怒り出すキツネ。

してやったり顔のタヌキ。

やおら飛び交うイスとビンタ。

何故か、とばっちりでイスを食らう私。

キツネが嘶き、タヌキは鳴き出す。

赤銅色の鬼が1匹出現、どうやらオーナーである。

髪を引っ張られ著しく河童化が進む私。またもやとばっちりを食らう。

正座するキツネとタヌキ、そして腕を組み地を踏みしめ、2人を睨みつける赤銅色の鬼。まさに仁王立ち。

うつむき茫然自失の私。

何かを書かされ店を叩き出される2人、そしてその2人に迷惑料代わり、と食事に誘われる私。

そう、これがこの2人との縁の一部始終である。

悪縁奇縁は多々あれど、ここまで酷い縁は見たことも聞いたこともない。
しかも出会ったのが、何の冗談か河童とキツネとタヌキ。
民俗学者であれば、手を叩いて喜びそうな取り合わせである。

その後、私は、２人と幾度か一緒に呑んだり食事をするうちに、２人の色々な話を聞くことが出来た。
なんでも幼稚園からの同級生とかなんとか、まぁともかく付き合いは長いらしい。
いわゆる親友同士ということか。

結局、この２人は仲がいいやら悪いやらで、バー「風光明媚」での１件も、よくあることに過ぎないらしい。
誠に迷惑千万な妖怪どもである。
むしろ妖怪物の怪というよりも悪鬼羅刹と言った方が言葉として正しいとさえ思える。

ところで、喧嘩の理由で最も多いものは同じ男を好きになってしまった、ということだそうだ。

おりしも風光明媚での悪縁より２ヶ月後、キツネとタヌキにより（わが友人）笹山の争奪戦が行われた。
ご都合主義的展開といってしまえばそれまでであるが、事実なのだからご勘弁願いたい。

さて笹山について大雑把に記す。
笹山は私よりも１歳年下で、大学の後輩にあたる。
美形とは言いにくいが、目鼻立ちの整った、いい男である。
昭和の香りがする好男子、といえばわかりやすいだろうか。
そして、なかなかの長身で細身の体型をしている。

さらに勤め先は銀行で、将来はなかなかに固い。

こんな笹山は、いわゆる結婚適齢期の女性にとっては格好の獲物であろう。

2人はひょんなことより笹山と出会い、恋に落ちた。
そしてどこから嗅ぎ付けたものか、私が笹山の先輩にあたることを嗅ぎつけた。
野生動物の嗅覚と強引さはすさまじいものであり、あれよあれよという間にみんなで呑みにいこうとなった。

ここで私が犯した愚は、風光明媚での1件を失念したことである。
人間とはかくも過去に学ばないものなのであろうか。

呑みの当日。
待ち合わせ場所である某駅改札前。
私と笹山は早々に到着し、他愛も無い雑談をしながら、キツネとタヌキを待っていた。

すると、不意に後ろから声を掛けられた。
振り返るとそこには、なかなかの美女が2人もいた。
これは逆ナンパというやつか？と、私が妄想たくましくしていたが、美女2人の声にどうにも聞き覚えがあるのだ。

美女達の声を注意深く聞いて、私はやっと正解がわかった。
正体はキツネとタヌキである。
私はその事実に気づくまでにかかった時間は、ゆうに１０秒を超えていたであろう。
しかし見れば見るほど全くの別人である。
キツネの目は普段の切れ長の目ではなく、大きくパッチリと開いた目に。
そしてタヌキにいたっては体型が私の記憶と大きく乖離している。

私はその余りの驚愕の事実に思わず口が半開きになっていた。
それにしてもキツネにつままれるという言葉があるが、タヌキにもつままれることが有るとは知らなかった。

実際、化粧でここまで変わるのか？とも思うのだが、私は、これは化粧だけで成せる技ではない、と断言したい。
多分葉っぱを頭の上に乗せてバク転１回、ドロン！という音とともに、変化したに違いない。
まさに現代に蘇る民話、御伽噺。
民話の葉っぱを現代語に訳すと化粧品とコルセットに変わるようである。
時の流れと技術進歩はかくも恐ろしい。

口を半開きにしている私をよそに、２人は笹山に擦り寄り親しげに話しかけた。
無論笹山もまんざらではない。
物の怪が変化しているとはいえ美女２人に囲まれているのである。
嬉しくない男はいないだろう。

そんな笹山の精神状態と相反するように、取り残された私の精神はそれはもうささくれ立っていった。
確かに美女2人に囲まれる笹山は羨ましい。
しかしなによりも腹立たしいのは、2人は私の前では今日のような（変化とも言うべき）化粧をしてきたことなど、一度も、ただの一度も無い、という事実である。

会場である居酒屋までの道のりを4人で歩いた。
正確には、3人と1人で歩いた。
私の孤独感は瘴気となり、まわりに噴出されていたかもしれない。
私の肩から背中から、黒いモヤのようなものが噴出され、世の中を暗闇で満たすのである。

世界を闇で覆いつくせ！

残念ながら私も良識ある社会人である。
そこまでで想像を留め居酒屋までの苦難の道のりを歩んだ。

しかしやはり眼前の事実だけは拭い難く、地獄の閻魔も裸足で逃げ出すような形相だったことを明記しておく。

実を言うと私は、この飲み会での記憶を殆ど持っていない。
その理由の半分は、酔いすぎた、からである。

確かに飲んでいないとやってられなかった。
何よりも、当時の私が記憶を封印したかったに違いない。

記憶を壷に入れ、蓋をして、有難いお札を張り、鎖でグルグル巻きにして海に沈め、止めに念仏の大合唱。
このくらいの気概で記憶が封印されているのである。

おぼろげながら残っている記憶では、酔っ払ったタヌキが私の髪の毛をつかんで引き抜いていた。
私がまた一歩、しかし確実に河童に近づき、その後色々あって笹山が悲鳴をあげて逃走し、唐突な幕切れを迎えた。
残されたのは、キツネとタヌキと私、壊れた店の備品とオロオロする居酒屋店員さん。

ただそれだけである。

こう思い出してみて、むしろ一番封印すべき記憶をやけにハッキリと覚えている気がしてならない。
もしも願いが叶うなら、過去の自分と問い詰めたい。
お前は阿呆か、いや阿呆だ、と。
過去の自分が阿呆だと未来の自分が困るのだ、と。

さて、2人との出会いそしてその後を思い返してみて、私には段々と暗く重い、怒りの情念がフツフツと湧き上がった。
得たものは無く、失ったものは時間と幾ばくかのお金。

そして髪の毛。

地獄の鬼でもここまで無体、法外なことはしないであろう。
これは山にでも篭って仏法、法力を修め、この魑魅魍魎、はたまた悪鬼羅刹とも言うべき妖怪2匹を退治せねばならん、と思い至った。

しかし、ただ一つ懸念がある。
仮に私が仏法、法力を修めたとしても、あの妖怪2匹に勝てる気は全くしないのである。
故に今回は山に篭るのを止めておき、代わりにキツネとタヌキに、悪戯メールをしこたま送っておくだけに止めておく。

化け猫　その１

河童の住処といえば、川や湖沼の底と相場は決まっている。
しかし私は、極々一般的な家屋に住んでいる。
これは私が河童ではない確固たる証拠といえる。

少し私の家をご紹介しよう。

２階建てであり、和室が４部屋とキッチン、そして風呂などの水周りがある。
不動産屋に言わせれば、４ＤＫというものらしい。

ここに私は１人で住んでいる。
同居者はおろか、犬・猫・ネズミ・霊もいない。

念のために申しておくが、未だ両親は健在である。
しかし一昔前に流行の田舎暮らしとやらに憧れ、去年父の定年退職を期に南の島に移住をしてしまった。
それが私の１人暮らしの理由である。

１人暮らしで４ＤＫというのは甚だ広く、なにより掃除が大変である。
孤独を感じることも多く、家の広さがそれをさらに加速させていく。

３０手前の成年男子が、寂しさで泣き崩れる絵は些かみっともない。
その有様は悪鬼悪霊魑魅魍魎すら呼びかねない、と冷静に判断し、主に１階のみ使用している。
以前は２階も細やかに換気や掃除なんぞをしていたが、やはり面倒になり、ここ１ヶ月ほどは立ち入っていないというのが現状である。

さて、そんな我が家で迎える土曜日、それが今現在の状況である。
諸兄ご存知のとおり、社会人にとって土曜日とは安息日である。
魔女の釜で煮られる様な仕事から解放される日、お釈迦様が地獄にたらした一本の蜘蛛糸、それこそが土曜日なのである。

おりしも天気はよく、行楽、買い物、はたまた黒髪とメガネが似合う読書好きな女性とのデートと、なにをやるにもうってつけの日柄である。
また街もセールやイベントも数多く行われる。
夜ともなれば街には沢山の人があふれ、華やいだ雰囲気になるものだ。
エキゾチックな恋に酔いしれることも、運命の出会いに心ときめかす御仁も多いのではなかろうか。

平日休みの方には申し訳ないが、私はこの土曜日の楽しさ、ワクワク感というのは、何ものにも変えがたいと思っている。

そんなことを考えながら、私は居間でテレビゲームに興じていた。

３０に片足を突っ込んだいい年の男が、外にも出かけず、昼日中から部屋に閉じこもり、あまつさえ女性の影なぞ微塵も感じさせずに、煎餅に齧りつきながらテレビゲームに興じ、「ぬおっ！？」などと発している有様を、皆様はどう思われるだろうか。

ここはあえて、強く断言させていただきたい。

私はとても楽しい。
これぞ土曜日の醍醐味である。

そぞろテレビゲームに熱中し、時がたつのを忘れていた。
なお、繰り返し申し伝えるが、私は土曜日という安息の日を、これでもか！これでもか！というほど満喫しているのである。

そんな私の背中に、何者かが刺すような視線を送るのを感じた。
それを感じた私は、出来れば黒髪の乙女であって欲しいと切に願った。
しかしそれはそれで不法侵入者であり、願ったとはいえ身の危険を感じるので妄想を思いな直した。
なんとか黒髪の乙女は止めていただきたい。
だからといって、覆面をした男は尚更やめていただきたい。

不法侵入者では無いことを祈りながら振り返ってみると、黒い塊がどかんと鎮座していた。

私は黒い塊がそこにある違和感と、覆面をした男で無かった安心感と、黒髪の乙女で無かった失望感があいまって時間が止まった。
１０秒ほど経過すると、時間がまたゆっくりと動き出した。
再度時間が止まらないうちに、私は黒い塊の観察をし、現状把握をすることとした。

この黒い塊には目や口、耳がついており、全体的に毛だらけ毛むくじゃらのようである。
つまりは生物のようである。
記憶のなかで最も近い生物を探してみると、どうやらこれは猫のように思われる。

即座には猫と断定できないのは、それがあまりにも巨塊だから、という理由による。

この巨塊は9割がた猫であろう。残りの1割はミュータントである。
しかし考えあぐね、可能性だけを論じていても埒は明かない。
人はどこかで埒をあけ、決断をしなければ前へ進めないのである。
人生もまた然り。

ゆえにこの巨塊を、勇猛果敢に猫であると断定し話を進めることにする。
取り急ぎ、より一層の観察を試みる。

たっぷりと2抱えはあり、威厳すら漂わせる堂々たる体躯。

その巨躯より放たれる風格は、半世紀は生きていると言われても、諸手をあげて納得せざるを得ないほどである。
尻尾なぞ猫又よろしく2又なんぞは優に超え、糸こんにゃく状になっているが、歩くのに邪魔なので1塊りにしている、それほどの太さである。

私の観察に気づいたのか、私と巨猫の目が合い、さながら睨み合いの様相を呈していった。

私をしっかりと見据える瞳は、おおよそ猫が発するであろう可愛らしさ、愛らしさを微塵も感じさせない。
むしろ私が値踏みされている心持になるような、いささか鋭すぎる眼光である。
その視線は、大仏に似た某占い師を髣髴とさせ、いつ地獄行きを宣言されるものかと、肌寒くなったほどだ。

巨猫と私の壮絶を極めた睨み合いは、一進一退、竜虎相食むが如くであった。
いや、まったく身じろぎはしていないので大嘘である。

果たして、どのくらい睨み合いが続いたのであろうか。
唐突に巨猫はぷいっと、後ろを向き、悠々と尻尾を天にむけ、この場より立ち去った。
私は巨猫との勝負に勝ったか負けたかは分からないが、一つ確実にいえることは、地獄行き宣告は免れたようである。

ほっと胸を撫で下ろし、私はゲームにまたも没頭するべくテレビに向き直った。
しかし、ある違和感を感じ、頭を回転させることにした。
そして数秒ほど頭を回転させ、私はその正体にようやく気がついた。

違和感の正体は、猫を飼っていないのに家に猫がいる、という事実であった。

この事実に私は愕然とした。
不埒な巨猫が、家主である私に無断で侵入し、心休まる土曜日を邪魔し汚したのである。
なお、断りがあったら入ってもいいのか、と問われたら、若干お時間を頂きたい。

それにしても、明らかにあの猫は大きすぎた。
私は猫博士ではないが、猫よりも織物工場にある毛糸玉の方が近そうである。
もはや工業製品であり、しかも規格外で生産ラインにはのらない類の。

私は、猫が大きすぎるという違和感には気づいたが、我が家に猫がいるという根本的な違和感には気が付かなかったのである。
なんというミスディレクションであろうか。
その手際は、かの高名な大泥棒、手品師もびっくり、もはや魔術妖

術の類である。
なので決して私がボンクラというわけではない。

しかしこのまま猫を野放しにしていては、家の中が毛だらけになるやもしれぬ。
糞尿をまき散らかされ、来訪者より変わった性癖の持ち主、とレッテルを貼られる事態になっては、生きてゆくことが難しくなる。
自分の毛が抜けたと思い、暗澹たる気持ちになり夜中一人呻く可能性も捨てがたい。

すわ一大事である。
私はゲームを一時中断し、巨猫を捕獲すべく山狩りならぬ我が家狩りを行うことにした。
猫め、目に物見せてくれようぞ。
私の土曜日を邪魔した罪は大きいのだ。

ともかく何事も計画、段取りが一番大事である。
即ち、我が家狩りのための作戦を練らねばならぬ。

まずは現状把握である。

私の家は４ＤＫ。
１階に２部屋と台所、そして２階に２部屋。
玄関のすぐ右側には２階に上がる階段があり、階段の脇には寝室に

入る扉がある。
廊下は奥まで伸び、行き止まりに台所。
廊下の途中には居間と水周りへのドアがある。
トイレと風呂は1箇所にまとまっている。
そして台所に勝手口は無い。
2階は私の自室だった部屋と両親の寝室であった部屋で、1ヶ月前より開かずの間のである。

さて、まずはどこから開始すべきか。

ともかく私は、侵入経路を第一に探すことにした。
猫を追い出してもまた侵入されてはイタチゴッコに他ならないからだ。

侵入経路としてはどこが可能性が高いであろうか。
私は猫の気持ちになって考えてみることにした。
しかし私は猫ではないため、全く想像もつかない。

猫の気持ちは猫にしかわからない。

私は、猫の気持ちを理解するため、一寸鳴き声でも出してみようかと思った。
しかし30前の男が猫の鳴声を出す、そのあまりの気味悪さは、巨猫だけではなく、さらに強大な魔物を呼びそうである。
私は冷静かつ客観的、合理的判断をして、中止することにした。

よくよく考えれば、私がわざわざ猫の気持ちになる必要などないではないか。
人間には人間にしかない道具を使えばよいのである。
ここは一つ知恵を使い、論理的に考えることにした。

猫は動物である。
これは確固とした事実であり、大前提である。
動物の行動をオーソドックスに考えれば、優先順位として食料確保が高いはずである。
つまり台所か。

まず私は台所を捜索することにした。

私は台所に到着し、しげしげと室内を眺める。

台所の窓という窓は閉じられており、進入された形跡は見当たらない。
しかし私は冷蔵庫が空いていることに愕然とし、冷蔵庫から黒くて巨大な塊が生えていることには驚愕を覚えた。
どう見ても、あの巨猫である。

しかし果たして、猫というものは冷蔵庫を開けるものだろうか。
巷の噂によれば、冷蔵庫を開けることは人間でなければ難しいと聞く。
もしや、やつはただの猫では無いかもしれぬ。

その巨躯に見合った、化け猫では無かろうか。

この巨大な塊の残1割の可能性はミュータントであったが、まさか妖怪であったとは。
改めて、妖怪に身にやつしたものは妖怪と引かれあうのであろうか、と思う。

物語の化け猫は行灯の油をなめていたというが、今生の化け猫は冷蔵庫より中身を喰らうのである。
確かに今の時代、行灯なぞ、日光江戸村か太秦映画村くらいにしかないのではないか。
化け猫もひもじい思いをしたくはなかろう。
物の怪もやはり時代とともに変化するのであろうか。

なお、ここまで朗々と語っておきながらなんであるが、私が冷蔵庫を閉め忘れた可能性には目をつぶっていただきたい。

さて私は化け猫を捕獲するべく、身をかがめ腰を落とし、にじり寄った。
カバディをご存知の方は、そのスタイルをご想像いただきたい。

化け猫はこちらに気づいたのか振り返り、そして動きがとまった。
口からは鯵のヒラキが生えている。
私の晩飯である。

私はフツフツと、暗い怒りの情念に支配されていった。
頭に水をたたえた皿があれば、一気に乾くほどの強い怒りである。
この怒りは秩序を逸脱した、猫の無礼かつ無秩序な振る舞いに対してである。
給料日前に晩のおかずが無くなったことに対しても、まぁ多少はある。

腰を落とし、臨戦態勢でにじり寄る私と、私をしっかと睨む化け猫。
戦闘開始はもう目前である。
化け猫の出方を予想しなくてはならない。

そう、ここで人間の武器、知恵と論理の再登場である。

おそらく化け猫は私の横を通り過ぎようとするであろうから、そこを捕まえるのは難しくないであろう。

もし股下を抜けようとするなら、足を閉じて進行方向を塞いでしまう。
すると左右どちらかに逃げるであろうから、やはり対応はそれほど難しくない。
なによりあの巨体である。そこまですばやく動くとは考えにくい。
論理的に考えても、私の勝算は極めて高いのだ。
見事な作戦に、私はほくそえんだ。

にじり寄る私。

さらににじり寄る私。

ほくそえみながらさらににじり寄る私。

これでは私の方が妖怪である。

さて、化け猫の体に緊張が走ったのがわかった。
戦闘開始はもうほんの数瞬後のことだろう。
しっかりと体を反応させなければならない。

この時、私は傲慢にも自分の勝利を確信し、油断していたのかもしれない。
古来より油断大敵というが、それをまさしく身をもって体感した。
やはり先達の言葉は正しいのである。

まさか化け猫がまっすぐこちらに走りより、そのまま顔に向かって飛び掛るとは予想もしていなかった。
私は「ぬぷぁ！」という叫びを上げ後ろに倒れ、その上を黒い塊がすごい勢いで走り去った。
私は身じろぎすることも出来ずにそれを見送り、階段をドタドタと上っていく足音を頭上から聞くのみであった。

人というものは、突発的な恐怖には体が固まるという。
それを聞いたときには、まぁそんなものだろう、と曖昧に納得した。
しかし、自分自身が身をもって体験した今、その曖昧さは霧散し、
確固とした納得を得ることとなった。

皆様にも想像してもらいたい。
得体の知れない黒い巨塊が自分の顔に向かって、猛烈な勢いで走ってくるのである。
その驚愕と絶望感は、怒りに駆られた私の精神を木っ端微塵に粉砕したのも納得いただけたことであろう。
人間の精神とはかくも脆いのである。
ただし、「ぬぷぁ！」と発するとは思わなかった。

化け猫が走り去った台所には、倒れた私と、見るも無残な姿となった鯵のヒラキが残された。

鯵のヒラキの瞳が、恨めしそうに虚空を見つめていた。

化け猫　その2

頭を振り気を取り直した私は、怒りを通り越し復讐心に心を奪われた。

化け猫にはその身にミッチリと教え込んでやらねばならぬ。
食い物の恨み、そして食費が無駄になった怒りの恐ろしさを。
ただし動物愛護法の範囲内で。

さて、私の頭上より鳴った音を頼りに考えれば、化け猫は階段の上に走り去ったと考えられる。
次の戦場は階段、そして2階である。

ずんずんと歩き、果たして私は階段にたどりついた。
そして、やはり奴はいた。

段上より私を見下ろすは、私に仇なす化け猫。
目ばかりがギラギラと異様な輝きを放っている。
私の非力さを蔑んでいるのであろうか、それとも哀れんでいるのであろうか、目にはそんな光が湛えられているように感じられる。
鋭い眼光に負けここで引き下がっては、人間の尊厳など朝露のごとき儚いものと証明するようなものである。

断じて引けぬ。
引いてはならぬ。

戦わねばならぬ。

私が1段2段と階段を上るも、化け猫は身じろぎ一つしない。
3段に足をかけたところで、化け猫に体に緊張が走ったのがわかった。
どうやら3段目が境界線のようである。

一刻も早く化け猫を退治したいところではあるが、先ほどの二の舞だけは避けなければならない。
ここは慎重に知恵を巡らせなくてはならない。
古来より化け物を成敗する人間は、知恵と勇気をもって戦うものである。
ここで私は一計を案じることにした。

その発想に、腐っても麒麟児神童と謳われた才媛、と、自分を褒めてやりたくなった。
ありがとうお父さんお母さん、息子は立派にやっております。

またもや論理的思考である。

さて、化け猫といえど猫である。
猫の習性を考えてみれば、ここで私が追うと逃げ2階を縦横無尽に駆け巡る。
もしくはこちらに走り出でて、私と肉弾戦の様相を呈するかもしれない。

要は先ほどと同じ結果になる可能性がある。

最悪、またも顔に飛び掛られ「ぬぷぁ！」と発し、階段より転げ落ちたり、さらに1階に逃げ込まれ、家中を蹂躙されるやも知れぬ。
発する音が口から「ぬぷぁ！」ならまだよいが、首から「ゴキャ」では目も当てられぬ。
ここは階段、危険地帯である。

しかし、ここで発想を逆転させてみよう。
私が一旦退けばどうだろであろうか。

化け猫は私という最大の脅威が去ったと思い、2階より降りてくるやもしれぬ。
いや、いずれは降りてくるより仕方ないのである。
なぜなら2階には、鯵は元より食物など一切無い。
これは一種の兵糧攻めであり、勝利のための戦術的撤退である。

兵糧攻めがうまくいき降りてきた場合どうするか。
普通に捕まえるのもよいが、それではまたもや逃げられる可能性もある。
そのため別の案を考えなければならない。

考えた結果、玄関を開けておき、降りてきたところを外に追い立てるのがよいと思われる。

妖怪物の怪を捕まえることが出来ないのであれば、悪鬼退散させるもの１案であろう。
悪魔も退治ではなく、退散させるというではないか。
化け猫の脅威を外に放出するのは気が引けるが、これも我が家の安泰のためである。
私が安心してゲームをし、土曜日を満喫するためには致し方ないのである。
許せ、ご近所の皆様。

早速作戦が決行された。
やることが決まれば後は実行するだけである。

階段の横にはダンボールでバリケードが築かれ、化け猫が降りてくれば玄関より外に出るほか道は無くなった。
降りてきたところを脅かしてやれば、さらに確実に玄関に一目散であろう。
私はほくそえみながら、階段横、ダンボールバリケードの後ろに隠れ、猫を待つことにした。

どれほどの時が経過しただろう。
優に１時間はまったであろうか。
待てど暮らせど、猫が階下に下りてくる気配が無い。
はたして私の怨念が放出され、化け猫がそれに気付いているのであろうか。
敵もさるもの引っ掻くものである。

程なくまた1時間ほど経過した。
しかしやはり待ち人来たらず、である。

待ち人が、若い黒髪とメガネの似合う、読書好きの女性であれば、期待に胸膨らませ、１２時間くらいなら待ち続けられる自信もある。しかし今は待ち人ではなく、待ち猫であり、さらには猫であることすら危うい化け猫である。
妄想と現実の共通点は、黒い毛をもっていることだけだ。
こう考えると期待に胸膨らむどころか、虚しさに胸が萎み、腹が減るばかりである。

さてどうしたものかと思案している最中、ふと玄関にキュウリが立っていることに気が付いた。
もとい、キュウリ酷似した人間が立っていることに気が付いた。

年のころは、私とほぼ同じくらいである。
長身痩躯、いや、むしろ細長いという言葉がしっくり来るシルエット。
顔もやたらに細長く、さらに顔色が恐ろしく悪い。
生まれ故郷は金星です、先週地球に来て日本語を勉強しています、といわれても、この顔色ならばなるほど説得力がある。
人はかくもここまで不健康な顔色になれるものか、と感動すら覚える。
そしてうっすらと顔に吹きで物がある。ブツブツと。

もし１０人に、この男にあだ名をつけて欲しいとお願いしたら、

9人はキュウリと答え、残りの1人はしなびたキュウリと答えるだろう。

しかし彼はキュウリなどではなく、貧乏神である。
しかも、さらに不幸で残念なことに、私の古くからの友人である。

だからこそ、ここまで酷い紹介が出来るのであるが。

この貧乏神の話は後に回すとするが、ともかく碌でもない時に友人がやってきたのである。

彼はこちらを怪訝そうに眺める。

まぁ、いかに友人といえどこの有様をみれば、怪訝な顔をするであろう。
玄関は開け放たれており、ダンボールでバリケードを作り、その影からいい大人が階段の上をしきりに気にしているのである。
ダンボールの影にいるのが小学生であれば、戦争ごっこでもしているようで、ほほえましい光景と見えるかもしれない。
しかし、ダンボールの影に隠れているのは、小学23年生であり現在は河童である。

しばしの沈黙の後、彼は私に、「何をやっているんだ?」と尋ねてきた。

微かに声が震えているのが認められた。
声の振るえだけでは混乱しているのか、それとも笑っているのかは判然としない。

私はとにかく今の状況をわかってもらうため、こと細かに状況伝えることに力を注いだ。

巨大な猫が私の家に入り込んだこと。

そやつに2階を占拠されていること。

これは猫を追い出す作戦であること。

私が特に妙な信仰を持ち始めたとか、薬物に手を染めたりはしていないこと。

作戦遂行のためには、どうしても張り付いていないといけないこと。

今現在の私は、このような奇天烈なことをしているが、ご存知のとおり普段はこの様なことはせず、静謐な生活を心がけていること。

お願いだから理解してください、そして他言しないでくださいということ。

このような内容を切々と彼に伝えると、とりあえず納得はしたようで、貧乏神は私に同情する旨をつたえた。

彼はなぜ突然やってきたかは会話にのぼらなかった。
おそらく、暇だったのだろう。

その後、私と彼は他愛も無い話をし、猫が下りてくるまでの時間を潰した。
しかしやはりというか、待てど暮らせど暇にあかせて舞を踊り始めても、化け猫は一向に姿を現さない。

さしもに飽きてきて、さぁどうしようか、いい加減突入するべきか、と考えていた時である。
貧乏神の「猫はどこから入り込んだんだ？」の一言で、私は背筋に寒いものを感じた。

うぅむ、確かにそうではないか。
そもそも私が考えていたことは、化け猫の侵入経路を調査し封鎖、2度とやつが入らないようにすることではなかったか。
状況を考えれば、どう考えても侵入経路は2階である。
私は阿呆か、いや阿呆に違いない。
麒麟も老いれば駄馬にも劣るのである。

自問自答をしながら、私は一目散に階段に向かい、バタバタと駆け上がった。
後ろからは、「おーい」、と声が聞える。
しかし構っていられるか、貧乏神より今は化け猫である。

２階に上がる途中、猫の姿は見えず、旧自室のドアが開け放たれていた。

猫だ猫。
あの化け猫め、人間様をたぶらかすとはやるではないか。
面妖な妖術をつかいやがって。
決して私が勝手に道化を演じているわけではないぞ。

私は旧自室のドアより部屋の中に踊り入った。
ドン！という効果音が鳴り響いた。
なお効果音は、無論私の脳内の話だけなのであるが。

そこで私の目に映ったものは、蹂躙としか形容の仕様が無いほど荒れ果てた私の部屋。
多数のスズメ、トカゲ、ネズミの死骸、そしてちょうど化け猫が入れるくらいに開いた窓と、突き破られた網戸であった。

さらに糞尿と腐敗の混じった、すえた臭いに鼻腔をくすぐられた。

化け猫の姿はそこにはなく、私はうなだれ膝をつきそうになったが、ちょうどそこに、糞尿があることに気づき、寸のところで太ももに力を入れ踏みとどまった。

もし遥か昔、化け猫騒動が起こった場合、坊さん、神主はどのよう

な対処をしたのだろうか。
おそらくお札をはり、部屋の中を塩で清め、更に出入り口にも盛り塩、そして最後に祝詞や念仏を唱え、空間を清めたのではないだろうか。

しかし私は坊さん神主ではない。
頭髪の状態は坊さんに近いものの、僧籍をとった覚えは無い。

とりあえず私は旧自室の惨状、この有様をなんとか清めるべく、使えそうなものはないかと家中を探した。

結果、お札の代わりにガムテープで網戸の穴をふさぎ、塩の代わりに消臭剤を振りまき、出入り口には盛り塩代わりのペットボトルを配備することにした。
これは坊さん神主の技ではなく、ホームセンターの技である。
そして止めは祝詞や念仏代わりに掃除機の音を響き渡らせた。

爽やかな汗をかき、作業を終えて一息つきたいと思い居間に戻ると、そこには貧乏神がいた。
しかも勝手に私の煎餅を口に運んでいるではないか。

手元の袋を見ると、たっぷりと入っていた煎餅は残り2枚となっており、貧乏神はそれを、2枚まとめてむんずと掴むと、口の中に押し込んだ。

貧乏神が煎餅を砕く、そのバリバリボリボリという音が不愉快この上なく、私を不愉快な気持ちにさせた。
しかし、貧乏神の顎の強さには素直に驚嘆した。

さて此度に化け猫騒動における金銭的被害をまとめると、鯵のヒラキと煎餅、しめて３００円ほどと相成った。

貧乏神・ぬらりひょん　その１

はたして、世に語られる神仏悪魔妖怪物の怪とは、いかなる数が存在するのであろうか。

例えば、日本古来の神々は、八百万（やおよろず）と言われる。
８００００００である。
これはものすごい数である。
それだけではない。
海を西に渡った異国では、悪魔の数に兆という単位が飛び出すそうである。
兆までいけば、天文学かニュースにおける国家予算、はたまた駄菓子屋のおばちゃんからお釣りをもらうとき以外では聞くことの無い単位である。
なんとも大きい数である。

他にも太古より語られた民話に、幾万人もの人に信じられる神話に、大量に生産され消費されるマンガに、誰にも読まれなかった小説に、友人の友人から語られる都市伝説に、合宿の深夜語られる噂話に。
そこには多くの人ならざるものが登場する。

その中に出てくる妖怪物の怪の合計と、砂漠の砂粒とでははたしてどちらが多いであろうか。

仮にである。

その数多の人ならざる物たちで、「絶対に出会いたくないランキング」を行ったとしよう。
皆様、栄えあるＮＯ１は誰であろうと思われるか。
様々なお考えがあるだろうが、私の意見を述べさせていただこう。
それは貧乏神ではないかと思う。

命まではとられないとはいえ、貧乏ほど人に忌み嫌われるものも少ない。
金が全てではないとはいえ、やはり無くては困るものである。
また金が無いのは首がないのと同じ、という言葉もあるではないか。

私は断言するが、貧乏神とだけは出会いたくない。

さて、その私の中での「出会いたくない妖怪ＮＯ１」の貧乏神であるが、先ほど私の煎餅を平らげていた。

この貧乏神、本名は塚田という。
そして前述のとおり、極めてキュウリに酷似した外見の持ち主である。

彼は、この町にある地元中堅建築会社の息子であり、確か今はその会社の役員をやっているはずである。
また、彼の父親が地域のお祭りや催し物の一切を取り仕切る、所謂地域の顔役であり、そこにもちょくちょく顔を出すため、そのうだつの上がらない風貌に反して、やけに顔が広い面も持つ。

私とは高校時代のクラスメイトであり、つまりはご立派な腐れ縁といえる。

今までに何度か縁が切れそうな時もあったが、縁がぷっつりと切れることはなかった。
やはり、河童とキュウリは切っても切れない縁なのであろうか。

さて、己の友人を貧乏神とはなんとも無体な呼び方であると思われるだろう。
しかし私とて、無根拠にこのようなあだ名をつけたりはしない。

塚田を貧乏神と呼ぶのには大雑把に２つの理由がある。

１つは、今現在私の眼前に広がる光景が答えである。
具体的に言うと、家主の許しも得ずにドカドカと家に上がり込み、我が物顔で煎餅を口に運ぶ、その厚かましさである。
他にも飲み会などで皿の上に残った最後のから揚げなどを、躊躇も無く口に運び咀嚼する悪鬼である。
このような厚顔無恥傍若無人唯我独尊なキュウリは、今すぐＪＡに返却するべきであると思う。
しかし窓口がどこか分からないので諦めることとする。
どなたかご存知でしたら、ご一報頂ければ幸いです。

さて、２つ目は彼が教えてくれる情報である。
もう少し細かく言うと、「有益な情報」と前置きのついた彼の話に

乗ると、碌な結果をもたらさないのだ。

少しわかりにくいので、過去の例を挙げてみよう。

某ＩＴ企業の株を薦められれば、１０日を待たずにその企業株券は紙くずとなった。

女子がたくさんいる、出会いがたくさんある、と勧誘されたサークルで２００万円の壷を買わされそうになった。

これからはこのゲームが伸びる、と紹介され購入したテレビゲーム本体が、半年後には新ソフトの開発と発売が中止となる憂き目を見た。

合コンに誘われれば、以前紹介したの狐と狸が登場し、紆余曲折を経て私の河童化がまたもや進行する。

などなど、その貧乏神っぷりには脱帽せざるをえない。

しかも本人は悪意など微塵も無く、全て善意であるからして尚のこと性質が悪い。
この男ほどありがた迷惑という言葉がハマることも滅多になかろう。

なお彼の名誉のために言っておくが、有益な情報、と前置きがつかない場合は悪くない結果ももちろんあることを追記しておく。
ただし、じゃあよい結果の例を挙げろ、と言われても、まぁおいそれとは出てこないのだが。

目の前の現実に話を戻す。

本日、この男が我が家に来た理由とは、やはり暇を持て余していたかららしい。
私も人のことは言えないが、全く持って暇な男である。
会社の役員とは暇なものなのであろうか。

しかし古い友人というのは、こういう時に誠に便利といわざるを得ない。
他愛も無い話に花が咲き、時間がどんどん潰れていくからである。
土曜日の昼下がり、河童と貧乏神が向かい合い、私が台所より持ち込んだ煎餅を食べながらの談笑である。
見方によってはどこの御伽草子かと思われるかもしれない。

しかし、三十路男が向かい合い談笑、と見方を変えれば地獄絵図に早変わりである。
なんとも痛々しい光景。

そして煎餅は食べきり、またもや私が台所より持ち込んだソフトサ

キイカに変わった。
彼はそれを口いっぱいに頬張り、モグモグギョクンと飲み干した。
それにしても、恐るべき顎と喉の強さ、もはや獣の類である。

彼は小一時間ほど話した頃、さも当然のことのようにフリーマーケットのことを、話題に乗せた。
何でも来週末に催されるとのことだ。
私は初耳であったが、なかなかに興味深い話だと思い、もう少し突っ込んで聞いてみることとした。

なんでも、それを言いだしたのは彼の父だそうだ。
流石に地域の顔役である。
やることなすことが周りを巻き込んでいく。
そして彼、貧乏神も主催者の1人として参加するのだという。

フリーマーケットの目的は地域振興。
目的が目的だからかどうかはわからないが、役所に届けたらすぐにOKがでたということである。

告知のチラシは回覧板や電柱のチラシ、コンビニなどにも貼ってあるという。

しかし、私はこの話を聞くまで、そのことを全く知らなかった。
私の行動範囲はさほど広くないので、まぁ無い話ではなかろう。
例えば、回覧板などが回ってきても即座に次にまわしてしまう。

貧乏神は私に、「客としてでよいので、友人などを誘って、参加して欲しい」と希望を述べた。
この男も主催者の1人であるから、参加者が少しでも増えて欲しいのであろう。
私も腐れ縁の1人として、微々たるものではあるが力添えをしたいとも思う。

しかも今回は、例の有益な情報、という前置きは出てきていない。
ぶっちゃけ行っても得はないかもしれない。
しかし少なくとも損なことは無さそうだ。
何より私自身、来週末も特に予定は無く暇を持て余しているのである。

私は塚田に、「では何人か連れ立って行こう」と伝えた。
すると塚田はおもむろに、満足そうに立ち上がり帰宅する旨を伝えた。

玄関まで送った私を塚田の「有益な情報だっただろ？」という言葉が襲った。
その言葉は私を戦慄させるに十分な破壊力を持っていた。

例のフレーズである。
有益な情報である。

しかし少し考えてみよう。
なんといっても、今回パターンが少し違うのだ。

前置きがある時は碌なことが無いが、今回はなんと後ろ置きである。長い付き合いで初めてのケースであるが、どう思案したものか。なお、後ろ置きという言葉があるかどうかは不問としていただきたい。

思案にくれ、曖昧な表情を浮かべる私を尻目に、塚田は誇り高そうに帰宅していった。

さて読者諸兄、私はどうするべきであろうか。

貧乏神・ぬらりひょん　その２

光陰矢のごとしとはいったもので、気がつけば土曜日となっていた。
そう、フリーマーケットの当日である。

私はこの一週間、貧乏神との約束を果たすため方々の友人知人腐れ縁に連絡をした。
しかし、「じゃあ行く」という友人が誰一人として存在しなかったのはなぜであろうか。
貧乏神への生贄と悟られたのか。
とりあえず、友人達は私ほど土曜日が暇ではない、充実している、そんな可能性には触れないのが優しさというものである。
そして私は優しい人が好きである。
愛をください。

さて、時計を見ると現在午前１０時少し過ぎ。
フリーマーケットは、今まさに始まった所である。
自宅から会場までは徒歩で２０分程度なので、そろそろ出ようかと考えた。
窓より空を見ればなんともよい天気。
柔らかな陽光がなんとも気持ちよさそうである。
会場までの道筋を散歩がてら歩くのも悪くない、と私は思い至った。

会場は運動公園と呼ばれているグラウンドである。
野球とサッカーが一度に行える広さであり、無闇に広い、という印象を私はもっている。

はてさて、ちゃんと格好がつくくらいには出展で埋まっているのだろうか。
私は運営本部と書かれたテントだけが存在する様を想像し、なんとも暗澹たる気持ちになった。
しかし考えていても一向に話は進まないため、私はともかく出発することにした。

さて古今東西、文人たちは散歩を好んだと聞く。
物の本でも「歩く」という行為は、脳に刺激がいき、頭の回転がよくなると読んだことがある。
考え事をする時には、辺りをウロウロ歩き回ってしまうという御仁も多くはないだろうか。
現実に会場までの道すがら、ホテホテと歩いている私は頭が回転しているのを感じ心地よくなった。
それはまるで麒麟児と謳われた頃に戻ったようであり、今であればかのアインシュタインの特殊相対性理論も完全完璧に理解できそうな気がする。
無論そんな気がするだけであるし、そもそも私は特殊相対性理論がどういうものかをよく知りもしない。

２０分ほど歩き会場に到着した私を待っていたものは、閑古鳥鳴き叫ぶグラウンド、ではなく１００を優に越える出店、そして来場者でひしめく会場であった。

色とりどりのビニールシートが地面に絵を描き、並べられた様々な商品が混沌とした模様を浮かび上がらせていた。

その雑然とした美しさは、空から見るとさながら曼荼羅のように見えるかもしれない。

食器、服、カバン、家電、カー用品、そしてなぜか等身大仏像まで並べられていた。
ソーセージの焼ける芳しい匂いも漂っている。どうやら売店もあるらしい。
大食いの友人、間宮なんぞがこの場にいたらさも嬉しそうな顔をしそうである。
間宮についてはまたいずれ書くこととする。

ともかくフリーマーケットはもはや、ちょっとした祭りの様相を呈しているようである。

改めて回りの人々を見回す。

走り回る子供。
それを眺める老人。
商品を物色している女性。
ビールを飲んでいる男性。
微妙な距離を保つ中学生と思しき男女。
手をつないで歩く老カップル。

などなど多種多様な人々がそこにはいた。
彼らの話し声、笑い声、足音が、ざわざわという喧騒を奏でていた。

その喧騒は、私に子供時分のお祭りを思い出させた。

綿菓子などほおばりながら、さらにたこ焼きが食べたいと駄々をこね、色とりどりの水風船に目を奪われ、お面を被りヒーローになりきり、好きな女の子を見つけてしまい物陰に逃げ込む、そんなあの頃のお祭りである。

ふと思い立ち、私は売店でビールを購入し一口飲んだ。
綿菓子をほおばっていた子供も今は立派な大人であり、綿菓子ではなくビールを選んだ。
我ながら年を取ったねえ、と空を見上げた。
そこには晴れ渡った空が広がっていた。

あてどなくフラフラと野良犬のようにほっつき歩いていると、屋根に大きく「運営本部」と書かれたテントを見つけた。
誘ってくれた貧乏神こと塚田には、ちゃんと挨拶をしておこうと思い至り、私は「友人たちはバラバラなり、思い思いに遊んでいる」と、頭の中で何度も何度も繰り返しながらテントに向かった。
何事にも事前準備は大切なのである。

運営本部のテントに貧乏神はいなかった。
しかし代わりにぬらりひょんがいた。
初見の方を一目で妖怪、ぬらりひょんと判断する失礼は重々承知である。
しかし秒ごとにぬらりひょんであると確信せざるをえないのである。

外見がなんといってもぬらりひょんなのである。
禿げ上がり妙な形をした頭と、頭とは不釣合いな小さい体を、質のよさそうな着物で包んでいる老人、がその全てである。
そのあまりのぬらりひょん具合は、某アニメより飛び出した、というのがもっとも伝えやすく分かりやすい。
あの、ぬらりひょんがそのまま目の前にいるのである。

ぬらりひょんは、「塚田」と書かれた名札が置かれた机に座しており、机上の紙に目を通していた。
なるほど、この人がフリーマーケットの発起人であり、塚田の父なのだろう。
私は塚田の父に会ったことがが無かったので、失礼ながら息子に似ている箇所を探した。
結果、貧乏神と似ている所は見つからなかったが、ぬらりひょんに似ている所はたくさん見つかった。

そう思ったのを知ってかしらずか、ぬらりひょんは私に気がつき、顔を上げた。

にこりと微笑み、「楽しんでいますか」とぬらりひょんは私に問いかけた。
それにしても、声まであのアニメのぬらりひょんに似ているとは思わなかった。
私の中での、ぬらりひょん指数は１２０％を超え針が振り切れた。
危うく口がニヤリとしそうになったが、何しろ友人の父である。
失礼があっては塚田の面目が立たなくなる。

私は威儀を正し、咳払い一つ「楽しんでいます。」と伝えた。

ぬらりひょんは妖怪の頭目、総大将なのだと聞いたことがある。
表をみれば黒山の人だかり。
フリーマーケットは大成功といえるであろう。
これだけの人間を集め、イベントを成功させるのであるから、名に恥じぬ、いや見てくれに恥じぬ実力の持ち主であることが容易に想像できた。

さりとて塚田のいない運営本部で、私がやることといえば、これ以上は全く思いつかない。
私は塚田の父に挨拶をし、早々にその場を離れることにした。

テントから出ようとした時、会場の隅から何かが現れ、周りが急に騒がしくなった。
どうやら何かのイベントが始まったらしい。
太鼓やラッパ、シンバルと思われる音が聞こえ、喧騒に音を加えた。

見えるところまで進んでみると、龍が踊っていた。
正確には、龍のハリボテを動かしている４人の男たちがいた。
４人は龍に獅子舞のごとく腹に腕を突っ込み、激しく上下に動かし会場のあちこち練り歩いていた。
あとは爆竹があれば、さながら中国のお祝いのようである。
龍は会場中を練り歩き、ある時は人々を脅かし、またある時は子供に怒られ一目散に退散し、周りに恐怖と愛嬌を振りまいていた。
これはなかなかに立派なアトラクションといえた。

龍はさらに動きを激しくし、舞い踊っていた。
周りの人は歓声を上げていた。

そんな時、龍に立ちはだかるものが登場した。
まさかの、あの等身大の仏像であった。
眼前に繰り広げられる仏ｖｓ龍の対峙、コメントに困る場面ここに極まれり、である。

そして仏像を後ろから抱えて動かしているのは、やけに長細く、キュウリに酷似した男であった。
仏像はなかなかに重いのか、えっちらおっちらという感じで動いている。

仏ｖｓ龍の対決。
これは見ものである。
暴れる龍とこれまたかなり重そうに暴れる仏。
予定されていたものなのか突発的なものなのかはわからない。
しかし迫力はなかなかにあり、周囲の子供は歓声を上げ、またそれが仏と龍の動きをさらに激しくさせていく。
なお仏は暴れないだろうという突っ込みはご勘弁願いたい。

どれほど仏と龍が暴れたであろうか。
そろそろこのアトラクションにも飽きてきたときのことである。

仏像を動かしている細長い男がいい加減疲れてきたのか、仏像を立てて地に置いた。
すると、仏像はそのまま細長い男に倒れこんだ。
そしてそれにそのまま巻き込まれるように押し倒される細長い男。
眼前に広がるはそんな光景であった。

「龍が勝ったぞー！」と歓声を上げる子供。

その言葉に舞踊る龍。
それと対比して、蛙のように押しつぶされた細長い男が哀愁をかもし出していた。

なんとも尻切れトンボな終わり方であるが、まぁ子供たちが喜んでいるのでよしとしよう。
勝負あり、である。

今回のことで分かったことがある。
貧乏神が「有益な情報」と後ろ置きをすると、貧乏神自自身にろくでもないことが起きる。
私はこの事実を深く心に刻み、そして「まぁやつも生きてはいるだろう」と楽観し、さらにはさしもに飽きてきたので会場を後にすることにした。
ふと空を見上げた。
そこには晴れ渡った空が広がっていた。

赤鬼・青鬼・鎌鼬　その１

私は常に被り物をして生活をしている、と申し上げたら、皆様どのように思われるであろうか。

これは、私は常に下衆・高潔に限らず本心を隠し、社会や他人と軋轢を生まないように素の自分とは違う人を演じる、仮面を被っている、という意味である。

頭にカツラを被っている、ということでは断じてない。

もしカツラを被っている、と思われた方は今すぐ腹を切れ。
私の頭髪は砂漠のごとき不毛な大地でも、戦争最前線のごとき荒涼たる焼け野原でもなく、ただ少し森林伐採が進み、真ん中にため池が作られているだけである。
不毛の大地にならぬよう、海草をモリモリと食べ、刺激を与え、閑話休題。

そして仮面を被っているのは私に限ったことではないと考える。
むしろ私を含めて人間というものは、すべからく様々な仮面を被って生活していると考える。
本音と建前は少し違う気もするが、大体あっている。

具体的な事例としては、友人の面白くも無い冗談には、大人の仮面をかぶって愛想笑いをしたり。

下衆な上司には、江戸時代の悪商人風な仮面を被り、もみ手で褒め称えたり。
嫌味な女にはイタリア人男性の仮面を被り、ご機嫌を取ったり。

まぁこんなとこであろう。

この話は読者諸兄、諸手を挙げて同意していただけると思っているし、また同意できなくともここは建前でかまわないので同意していただきたい。
ここでも仮面をかぶって欲しいのである。

ようするに、男女個人差あるだろうが、自分の心の倉庫にある様々な面を、その時々で使い分け、その場を一番うまく回すような仮面を被りながら生きている、それが私の持論である。

しかし手元が狂い、時に滑稽な、洒落にならない仮面を手に取り被ってしまう時もある。
そう、例えば酒が入った時などはその最たるものではないだろうか。

仮面の被り間違いは時に取り返しのつかないことになるという例がある。
これは友人の友人から聞いた話しである。

ある男が意中の女性を食事に誘おうと思った。

彼は独身男性であり、無論下心がないといえば嘘であった。
出来ればその女性と今よりもう一回りほど仲良くなり、そのままお付き合いなぞしたいわけである。

しかし彼は大変不名誉極まりない爵位、独身子爵を賜るほどの独身貴族である。
そんな独身貴族の仮面ではなかなか女性を誘うことは難しい。

独身貴族の仮面を被っていると、牛丼屋で大盛りつゆだくを、ハムスターのほっぺのようになりつつかっ込んだり、カレー屋でから揚げとトンカツをトッピングしその雄大な光景に悦に浸ってしまったりする。
普段の生活がそれでは、女性の好むイタリアンレストランなんぞ頭の片隅にも浮かんでこない。
そもそも彼にはパスタとスパゲティの差もよく分からない。

しかし彼も独身と冠がつくとはいえ貴族である。
そこは彼女のためならばと、努力を惜しまぬ正しい貴族の仮面を被ったのである。
評判のよいレストランを探したり、優雅な物腰に気をつけたり、彼女の好きな映画を探したり、と、涙ぐましい努力をした。
彼は趣味であるゲームの時間を削ってがんばったのである。

そして努力が実ったか運がよかったか、その女性とデートの約束を取り付けたのである。

デートの当日、その夜某駅前。
時期は春先であり夜はまだ冷える頃であったが、彼の心は高鳴り熱いくらいであった。
目に映る全てが愛おしく見え、この世の全ては今このデートのためにあると錯覚し、そして全てのものに感謝をしたくなった。

さて彼女の家は待ち合わせの駅より3駅ほど北にあり、彼の家は5駅北である。
どうやら彼のほうが早く着いたようである。

そして予定の時間を目前にして、彼女がやってきた。
彼にとって初めて見る、彼女のプライベートであり私服である。
少し胸元の開いたシャツと緑のスカートを着用しており、とてもよく似合っていた。
そして若干芽生える下心。
しかし紳士の仮面を被っている彼は、下心が心をよぎったなどおくびにも出さず彼女をエスコートした。
道すがらにこやかに談笑し、デートの場所であるレストランに到着した。

出てくる料理に舌鼓を打つ二人。
おいしい食事は酒をすすませ、酒は人を饒舌にさせる。
その間も彼は、学者の面、芸人の面、詩人の面なぞ使い分け、彼女を飽きさせぬよう務めた。
2人はよく食べ、よく飲み、よく話し、よく笑った。

食事も終わり、あらかた話して夜の9時。
彼は彼女を家まで送り届けることにした。

早っ！！と思われるかもしれない。確かに夜はこれからである。
確かに彼はその後映画も予定していた。
しかしそれでは彼女の帰りが遅くなってしまう、と考えたのだ。
彼はあくまで紳士であり、女性への気遣いを忘れてはいなかった。
濡れ場や色っぽい話しが無くて恐縮であるが、これは友人の友人の話なのだから私の責任ではない。何卒ご勘弁願いたい。

さて、彼女の家までは北へ3駅ほどであり、彼の家は北へ5駅。
無論電車で帰宅をしても問題は無いのであるが、2人ともいささか酔っ払っている。
万が一を考え、タクシーを使い帰宅することにした。

タクシーに乗り込み数秒後、彼女は酔いすぎたのか、コロンという擬音と共に寝始めた。
さらにはスースーという寝息まで聞こえるではないか。
彼はかわいらしいなぁと思いながら、彼女を見やる。

彼も男であり、というのが言い訳になるかは分からないが、どうしても胸元からみえる肌色に目がいってしまっていた。
不埒な所を見るのは決して紳士ではない。それは彼もわかっていた。
しかし見ようと思わなくとも、そこが引力を発しているのか目が吸い寄せられてしまうのである。

さらには酒も入っているので、その引力はことさら強力である。

彼は最後まで紳士の仮面を被るつもりであった。
彼女を無事に送り届けるのが、彼にかせられた最後の使命であり、無防備に眠りはじめた彼女は彼の守るべき人である。しかしはたして。

雌雄を決するべく、紳士の仮面ｖｓ酒と男性の本能が開始された。

その勝負は1ラウンド2秒、紳士の仮面がＫＯ負けされ、即座に幕を閉じた。
彼の被っていた紳士の仮面は気持ちよく砕け、その下から見まごう事なきエロ河童の仮面が現れた。
そして、その視線に気づいたのか彼女は目を覚まし、しかしてその3秒後に彼の左頬には綺麗な手形がつくことになった。
ここまでで実に5秒ほどのことである。

そうである。
雌雄を決した勝負より、手形がつくまでの短時間で、私、もとい友人の友人の涙ぐましい努力は水泡に帰したのである。
その後どうなったかは詳しくは書かないが、彼女の中の彼の株価がバブル崩壊のごとく急下落したことはご理解いただけたことであろう。

長々と書いたが、酒が入ると普段見れない面が見れて面白くも恐ろ

しいことになる、ということである。

酒とはかくも恐ろしい。

赤鬼・青鬼・鎌鼬　その２

私は酒が好きであるが、かなり弱い部類に入る。
ビールをコップ１杯程度であれば問題は無いが、日本酒や焼酎など少し強めの酒になるともうだめである。
皆様方のご友人にも、強い酒が飲めない人というのがいると思うが、おおよそそんな感じだと思っていただきたい。
まぁ経済的といえば経済的である。
３５０?のビール１缶の代金、何百円あれば十分気持ちよくなり、浮世の憂さ晴らしが出来るのである。
我ながら安く出来ている。

私は酒は好きだし、友人との飲み会も好きである。
しかし会社の飲み会は全く好きではない。

会社の飲み会とは、お題目はコミュニケーションや親睦の場であるが、実際はお説教の場であり仕事の延長線上に座している。
このあたりサラリーマン諸子であれば、納得していただけるであろう。

恐ろしいほどの気を使いながら、そして眠くなったのを我慢し、上司のお説教や人生訓を聞くというのは苦行以外の何者でもない。
そして苦行の時間ほど長く感じる時間も無い。
以前、上司のお説教を聞きつつ、もう１時間は経過したと思っていたら、６分しか経過していなかったことがあった。
その驚愕の事実に私は、一寸悟りが開けそうになったが、ブッダの

言うとおり苦行では悟りは開けず、開いたのは瞳孔ばかりである。

そして、なにより飲ませられる、ということがイヤである。
自分のペースで飲めないというのはこれまた苦痛である。
上司に「俺の酒が飲めんのか」と言われれば、カッパンカッパン、
それこそザルのように飲み込まざるをえない。
あぁなんと悲しいサラリーマンの性であろうか。
酒に弱い私はその後、いいパンチをもらったボクサーのように倒れ
こむのがお決まりである。
もうすぐ三十路というのに、おもちゃのような扱いを受けているの
である。
私の体をおもちゃにしないで、と女性が言えば卑猥であり、あらぬ
妄想を掻き立てられるが、私が言えば冷ややかな視線で射抜かれる
こと請け合いである。
男女平等を叫びたいところであるが、こんなところが平等になって
も全くうれしくない。

会社の飲み会で溜まったストレスは、悪友たる貧乏神などと飲みに
出かけることで発露することにしている。
言葉悪く言えば口直しであり、言葉よく言えば…と思ったがどうい
っていいか言葉が浮かばない。
まぁ愚痴吐きゴミ捨て場である。

相手は貧乏神の時が多いが、狐や狸はたまた笹山、そしていずれ書
く間宮のときもある。
誰と飲むにも、会社の人間と顔を合わせる可能性の低い、やけに奥
まった店で飲むことにしている。

そして友人と大いに酒を飲み、語り、心の溜まった澱を吐き出し、そして厠に酒を吐き出すのである。
ここで最も重要なことは、会社の人間が絶対に来ない店、ということであり、これは自分が匿名でいられる場所という意味である。
壁に耳あり障子に目ありな場所で呪詛は唱えられないのである。

ある土曜日、いつもどおり私は、貧乏神と飲むことにした。
先週の会社の飲み会でもひどい目に会ったはずである。
はず、と不確定なのは、その時の記憶がぶっ飛んでおり、翌朝道路の中央分離帯で爽やかな目覚めを迎えたことしか記憶に無いからである。

さて最近のお気に入りは、やけに奥まった店「居酒屋きんぴらごぼう」である。
この店は看板に偽りがあって、メニューにきんぴらごぼうがない。
看板に偽りありなのだが、そのことが人の話題に上らない知名度を誇る。
要するに流行ってはいない。
まさしく私のような匿名性の闇に潜みたい者にとっては、これ幸いなな居酒屋なのである。

いずれ書くといっていた間宮について唐突に記す。

間宮は貧乏神と同じく高校時代からの友人である。
高校卒業後は京都にある某有名私大に進学をした。
大学では建築土木を修め、現在は建築系の大企業に現場監督として

勤めている。
専門の建築土木はもとより、歴史、心理学、哲学、文学、はたまた民俗学にいたるまで幅広く、また深い造詣をもっている。
ちなみに初対面時に披露してもらった知識は、仏像についてであった。
そして身の丈は１９０ｃｍを少し超え、その長身を生かしスポーツも得意であり、さらには顔は少し赤みを帯びている。
古来より美形を現す表現として紅顔というのがあるが、彼はまさしくそれである。

さてここまで読んで、皆様間宮をどのようにイメージされたであろうか。
有名私大卒、博識、長身、スポーツマン、紅顔。
ここまでは古代ギリシャ美術がイメージするような、完璧男子を表すキーワードがちりばめられている。

しかし人間とはそれだけで構成されているものではない。
このままでは木を見て森を見ずであるため、カメラを引いて全体像を書いてみることとする。

さて、身長は１９０ｃｍを少し超えているが、目方も１３０ｋｇを少し超えている。
マゲを結っていない力士をイメージしていただければ大方間違いない。
また髪は天然パーマであり、かつ全体的に体毛が濃く、その剛毛は使い古した亀の子だわしに比喩される。

さらに目はぎょろぎょろと大きく、やたらめったら目力がある。
電車の中で目を逸らされることを得意とするほどである。

そして建築土木を生業としているせいか、専ら作業着を着てあちこち出歩き、またもや生業の癖なのか、声も大きくよく通る。
紅顔もあいまって、形容するならばまさに赤鬼であり、おそらく金棒が日本一似合う男であろう。
惜しむらくは、金棒が似合うコンテストなぞ過去一度たりとも行われたことがないことである。
まぁそんなコンテストは誰も得をしないのであるからやる意味も無い。

間宮について詳細に述べてみたが、美形のイメージを損ない、気分を害された方も見えるかもしれない。
しかしこれが現実であり、現実は時に非情である。

さて、赤鬼の食事について述べよう。
彼はその巨躯に見合った大食漢、早食いであり、エンゲル係数１２０％、借金をしてでも飲んで食うという噂である。

鯨飲馬食、鯨のように飲み、馬のように食うという言葉があるが、彼のためにあるといっても過言ではない。
むしろ、鯨を飲み込み馬を食らうといっても、間宮であれば強ち嘘に聞こえない。
大体私達普通人の３日分を、１日で平らげると思っていただきたい。
ご飯をジャーからしゃもじで食べていたという目撃情報もあり、そのほどが伺われる。
ちなみに目撃者は貧乏神であるが、どんなシチュエーションでそれ

を見かけたのか。
どのような理由のせよ、さぞや迫力満点な光景であったであろう。
以前テレビで巨漢タレントがカレーは飲み物、とのたまっていたが、間宮にしてみれば親子丼くらいまでならば飲み物の範疇ではないかと思う。

しかし酒にはめっぽう弱く、やはり強めの酒をおちょこ一杯飲んだ程度で赤ら顔の色が濃くなる。
いや、むしろ赤というよりも赤銅色になる。
酒の弱さは私とどっこいどっこいである。

さて唐突に間宮の紹介が始まったのは、私たちが「居酒屋きんぴらごぼう」に入ったとき、間宮がいたからである。

河童と貧乏神、そして赤鬼で期せずしてささやかな酒宴が行われることとなった。

しかし気心の知れた友人というのは、一緒に飲んでいて気楽なものである。
３人が互い互い１０年以上の付き合いであるから、どんなヤツで何が好きで何を言ってはいけないのか、学生時代の失敗談も失恋話も、全てを知っているし分かっている。

貧乏神がイベント企画の話を身振り手振りを交えてプレゼンテーションすれば、私は唇をアヒルのように尖らせ、あーでもないこーで

もないと茶々を入れていく。

赤鬼がいかつい顔をニコニコさせながら唐揚げを口に運んでいれば、貧乏神が負けじと赤鬼から奪い取ろうとし、頭を小突かれる。

私が過去の失敗を思い出し、心の深遠に飲み込まれそうになると、赤鬼はそっと哲学の話題などを話し出し、私に議論を吹っかけ、そして内容が分からない私は自分の学のなさを呪い、更に深遠に近づいていく。

それら長年の歳月繰り返されたものであり様式美である。
それが一通り終わると、次は皆で様々なものに向けて呪詛を吐くのである。

むかつく仕事の同僚、部下、上司へ
不甲斐ない政治へ
振られた女性へ
大盛りを頼んだのに全然量の足りない飲食店へ
バグだらけのゲームを発売したゲーム会社へ
等身大仏像に対して
不甲斐ない抜け毛と毛根へ

と、それはもう止め処なく。

しかし私たちは呪詛をはいた後は、最後に必ず笑いを入れることにしている。
呪詛をただはくだけでは鬱屈した気持ちになるだけだからであり、仕事でガチガチに固められた心を解くためには、笑いが必要である

のだ。
笑い話にしようとして滑るときも多々あるが、まぁ滑ってもいいじゃない、酒の席だもの。

2時間ほど2人で語ったところで私たちは満足をした。
酒は百薬の長というが、それは友人との語らいがあって、初めて言えるものだと切に思う。
それほどまでに私たちは飲み、笑い、呪った。

ところで我々は1つミスを犯した。
間宮がいつも以上に酒を飲んでいることに気づかなかったのである。

赤鬼・青鬼・鎌鼬　その３

「きんぴらごぼう」を出たときより、赤鬼の様子がおかしかった。
うなだれ、首の据わっていない赤子のように、頭が前後左右に揺れている。
いや、赤子の首を振り回してはいけないが、明らかに酔いすぎた風情である。
赤鬼の家まではここから徒歩で２０分程度だそうだが、この様子では些か危うい。
おそらく家に着くまでに倒れるか、頭をそこかしこにぶつけ、角が出来上がるかのどちらかであると思われた。
万が一を考え、私と貧乏神はタクシーを呼ぶこととした。
タクシーが到着するまでの間、赤鬼の首は動きっぱなしであり、ちょっとしたホラー映画の１シーンと言えた。

程なくタクシーが到着し、赤鬼を乗りこまさせる。
間宮を無事に自宅まで送り届けるべく、私と貧乏神は同乗することにした。
運転席には運転手さん、助手席に私、そして後部座席に赤鬼と貧乏神という布陣である。
本来は後部座席に３人じゃないのか？と思われた方もいらっしゃるだろうが、そこは間宮のサイズを考慮していただきたい。
不意に後ろを振り返れば、首を振っている赤鬼がまず目に入った。
いやすでに顔色が変色し、赤鬼は青鬼となっていた。
その横にはだらしなく涎をたらしている貧乏神である。
こいつも酔っ払っているのか。

5分ほどで我々は間宮の家に到着した。

間宮は実家暮らしを良しとせず、男たるもの親の脛をかじってはならない、という硬派な持論により絶賛一人暮らし中である。
しかし彼が住んでいるアパートは、彼の外見と正反対なおしゃれな洋風白壁、そんな小奇麗な建物であった。
例えるなら、女性誌に「出来る女の部屋、スィーツルーム特集」なんぞで出てくる建物である。
読者諸兄申し訳ない。
うまく説明できないし、そんな特集があるとも思えない。
要するに、彼にはいまいち似合わない感じなのである。

青鬼は、おぼつかない手つきでポケットより鍵を取り出し、ドアを開けた。
すぐさま私と貧乏神は、青鬼を部屋の中に投げ入れた。

放り投げられた青鬼は、廊下にすっくとその両足で着地した。
無論室内に電気がついていないので、暗がりの中に青鬼の巨大なシルエットが浮かぶ格好となった。
程なくフラフラと室内に入って行き、慣れた様子で明かりをつけ座り込んだ。
ボフゥという音が聞こえたことから、ソファに沈み込んだものと思われる。

私と貧乏神は中に入ることとした。

彼の部屋は１ＬＤＫというのであろうか、大きなリビングに１部屋が併設されている。
リビングには大きなテレビがあり、その前にはソファ。
家具も含め全体的にベージュで構成され、こざっぱりとした印象を与える。
掃除や整理整頓も行き届いているらしく大変住みやすそうである。
男の一人暮らしといえば、新種のキノコが生えそうな雑然さを特徴とするが、キノコどころか埃すら探すのは困難であろう。
しかしキッチン部分には業務用と思われる巨大な冷蔵庫そして大量の米袋があり、私は、あぁ間宮だなぁと妙な安心感を覚えた。

一仕事終えた充足感と酔っ払った気持ち悪さが私の中で持ち上がった。
とにかく冷たいものでも飲んで一息つきたい。
貧乏神はどうだろうとそちらを見てみると、涎で顔半分を光らせながら、あらぬ方向を見つめていた。
このままでは涅槃に旅立ちそうであるので、早々に気付け薬が必要と感じた。

私はとりあえず冷蔵庫を開けた。
冷蔵庫の大きさから豚一頭が逆さづりで入っているかと予想したが、中身は普通の食料群であった。
しかし量は桁外れであり、一人暮らしとは思えないほどの食料が詰まっていた。
そのつまり具合を言葉であらわすならば、「みっちり」もしくは「ボンレスハム」である。

水分も豊富にあり、ポカリスエット、ミネラルウォーター、スプライト、コーラなど選り取り見取りである。
すべてが2リットルというのが間宮らしく、またもや妙な安心感を覚えた。
私はポカリスエットを取り出し、蓋を開け、そのまま口をつけ中身を胃にぶちまけた。

ごぶごぶと音を立ててポカリを飲む。
息が続かなくなり、「ぶぇあ」という珍妙な言葉と共に息を吐き出す。
私は一息つくことが出来、生き返った。
なお別に死んでいたわけではない。

貧乏神を見れば、先ほどと同じように涎で顔半分を光らせていたが、なぜか正座で微動だにしていない。
そして瞳はやはり虚空を見据えており、すでに涅槃への片道切符を購入したようである。
なぜ正座なのかと疑問は浮かぶが、とりあえず私は貧乏神の目の先にポカリを差し出した。
今まで虚空を見つめていた貧乏神の目がポカリを捉えた瞬間、その瞳は野性味あふれる輝きをたたえた。
そして野生動物のような素早さでポカリを強奪すると、ごびゅぼぎゅと喉を鳴らして飲みだした。
正確には、飲んでいるのかこぼしているのか分からない有様で、顔半分を先ほど以上にぬらぬらと光らせた。
彼は「ぶろぁ」という奇天烈な言葉と共に息を吐き出し、服の袖で顔をぬぐった。

一息ついた我々はリビングの絨毯の上に座り込んだ。
私たちは「たまには飲みすぎることもあるよな」と言葉を搾り出し、ばつの悪そうな顔で見合わせた。
そういえば昔にもこんなことがあったよな、昔からやっていることは変わっていないよな。
仲のよい奴らでつるみ、遊び、笑い、呪う。

不意に間宮が「ぶるぉぉぉん・・・」というエンジン音のような声を発し起き上がった。
そして周りを見渡し大きく息を吸い込み吐き出すと、私たちと同じようにばつの悪そうな顔をした。
そして冷蔵庫に行き、ミネラルウォーターを取り出すと、一気に喉に流し込んだ。
2リットルほどの水が、ものの数秒で間宮の胃袋に飲み込まれた。
この地球上にもブラックホールはあるようである。

水を飲み干した青鬼は赤鬼にもどっていた。これで一安心である。
そして、赤鬼は私達を振り返り、やけに無邪気な顔でこう言った。

「なんで俺たち女にもてないんだ?」

鎌鼬という妖怪は、岐阜県飛騨地方の妖怪で、3匹が連なってやってくるという言い伝えだそうだ。
1匹目が対象の体勢を崩し、2匹目が斬り、3匹目が薬を塗る。
3匹目が薬を塗るために、血も出ず痛みも無いとのことだ。

「なんで俺たち女にもてないんだ？」

「なんで俺たち女にもてないんだろうな…」

「なんで俺たち女にもてねえんだあああああ！！」

しかし間宮の言葉から発生した鎌鼬は、３匹ともが勢いよく斬りつけてくるという恐るべき妖怪であった。
薬も塗られないのでそれはもう痛く、血は滲まないが涙が滲んだ。

不意をつかれなす術もなく3回膾に斬られる私と貧乏神。
その3回の攻撃で私達は、十分に戦意を喪失し、顔をうなだれた。
さらにその言葉は、おそらく間宮自身にも斬激となって襲い掛かっていのであろう。
言葉を発するたびに手で宙を払うマネをしており、そして3つ目の言葉を発した後、床に突っ伏した。
後にいびきが聞えてきたところから察するに、そのまま寝てしまったようである。

私はうなだれながら貧乏神の様子を伺った。
貧乏神の顔から水分が落ちるのを確認したが、それが涙なのか涎なのかポカリなのかまではわからなかった。

間宮が言葉を発した時間は、ものの数秒であろう。
しかしその数秒で、酒を酌み交わし、交友を暖めたこの数時間は一

瞬でふいになった。
何十年もかけて丹念に作りこみ築いた建造物が戦争で爆破され、瞬時に灰燼に帰した、そんな有様である。
武力紛争は何も残さない。
ただただ心が痛ましいばかりである。

私はうなだれながら、痛む心を治め頭を回転させた。
普段の間宮はいきなりそのようなことを言う男ではない、と。
ここに断言するが、私達はたしかに驚くほどもてない。
そしてそれは客観的な事実であり主観的にも事実であるが、我々はそれでも面白おかしく生きてきた。
独身貴族の仮面を被り、自嘲しながらでも仲良く楽しく生きてきた。

しかし今はそれら、独身貴族の仮面が剥がれ、崩れて落ちてしまっている。
「女性にモテない」という事実は手ひどい攻撃となって降りかかってきた。
例えるならば、アクション映画で主人公をぺしゃんこにしようと両側の壁が押し迫るシーンがあったとしよう。
我々には常にその壁が押し迫ってきている。
常日頃は、独身貴族という仮面をつっかえ棒代わりに壁を防いでいたが、酒によりそれが割れ、壁にぺしゃんこにされてしまった状態であるといえる。
間宮は壁に挟まれ、一種のヒステリー、パニックを起こし自爆。
そして我々に誘爆。
結果、恐るべき大惨事を引き起こしたのである。

やはり酒とは恐ろしい。

貧乏神の顔からまた水分が落ちた。
その後、ズルッと鼻をすする音がしたことから、鼻水であることが確定的に言えた。
やおら貧乏神は、深呼吸を1つすると、すっくと立ち上がり、胸をはり、肩をいからせた。
目には決意を秘めた光がたたえられており、その姿はさながら戦場に赴く将校のようであった。
彼はその凛々しい姿のまま一言も語らず、部屋を出て行った。
後に残された私はどうしていいかわからず、もう1部屋より毛布を持ってきて、それに包まり眠むろうと思った。

なおこの大惨事を招いた張本人に意趣返しがしたくなり、間宮の鼻の下に油性マジックでヒゲを書いたことをここに明記させていただく。

七人みさき　その１

間宮部屋での惨劇より1週間ほど経過した。
それにしてもこの1週間ほど、塚田と連絡が一切取れなかったのはなぜであろうか。
電話をしても出ず、メールを飛ばしても返ってこない。
さりとてわざわざ自宅に押しかけるほどの気力は無い。

これは一寸何かあったかもしれない。
まさか惨劇のキズが癒えずに身投げでもしたのではないだろうか。

塚田はああ見えてもガラスのような精神を持っている。
そして砕けた心は、ガラスと同じようにそっくりそのまま再現することは不可能であることを彼奴は知っている。
常日頃の厚顔無恥な行いは、そのガラスの精神を守るための仮面なのである。
一度溶かし、再度形を整えてやらねばなら

申し訳ないがここで筆が止まった。
私はやはり嘘を書くことは出来ない性分なのである。

やつに限って言えば、身投げやらその様なことは断じて無い。
ガラスはガラスでも車のフロントガラスに用いられる合わせガラスのごとき強度を誇る。
叩いても殴っても砕けないガラスのハートだ。

ある作家は玉川上水に入水自殺したある作家を、その様なことは絶対にしないヤツとのたまったが、同じ心境であろう。
いや、その場合、結局はその作家は入水自殺してしまったのだから危ういではないか。
ココは聞かなかったことにしていただきたい。

まぁ多分、携帯電話をなくしただけであると思われる。
いやそうに違いない。
更に本日は土曜日であり、塚田のことばかりにかまけている暇はない。
私にはゲームという趣味があり、ゲームによって土曜日を満喫するのである。
連絡の付かない塚田に思いを馳せていても埒が明かないし、なにより一向に面白くない。

空腹を感じ、ふと時計を見ると午後１２時過ぎ。
そろそろ昼なのだから、腹が減って当然である。
さて飯を腹に入れるのが先か、ゲームが先か。
これは世紀の難問である。
ポアンカレ予想も真っ青であろう。
しかし私は強靭な精神力でゲームを選択した。
何事にも優先順位は存在し、私の場合はゲームのほうが優先順位が高いのである。
これが黒髪の乙女とのデートであればデートを優先するのであるが、当然ながらそのような用事は影も形も無い。

つまりはゲームである。

ともかくゲームなのである。

今やっているゲームは世代交代を繰り返しながら、憎っくき敵を打ち倒すＲＰＧである。
古いゲームではあるが、これがおもしろい。
親が果たせなかった宿願をいずれ子が果たせるように、技術や宝物を継承していくのが主要な行動である。
その継承していくという過程が面白い。
キャラクターには寿命が設定されているので、いかに気に入ったキャラクターが存在しても、いずれはいなくなってしまう。
子孫を残すことの大事さを痛感させられる。
一寸「私は子孫残せるのか？」と思ったが、なに、今はゲームをすることが先決である、気にすることは無い。
考えを変えよう。
いや、むしろゲームの中ですら世代交代が行わ

ピンポーン

ゲームを始め、自らに苦行を課す直前に家のチャイムが鳴った。
思考を中断するのに渡りに船、いや客人が来たのであれば、それを優先するしか仕方が無いではないか。
いやぁ、まいったまいった。
私は嫌な汗をかきながらドタドタと玄関までかけていきドアを開ける。
ていのよい言い訳なのはちゃんと理解しているので、一切触れない

で頂くのが人情ではないだろうか。

バーン！！と、いう擬音と共に颯爽とドアを開けた私の目前に、巨大なビニール袋３つが姿を現した。
なお、擬音は大嘘である。むしろ掛け声。

中からは芳しき芳香が漂っており、おそらく牛丼であることが想起された。
ビニール袋を持っている手は巨大で毛深く、間宮の手のようであり、手をたどって顔を見てみるとやはり間宮であった。
そしてその後ろには久しく見なかった顔が並んでいた。

林
中村
片岡
加藤

彼らは高校時代の友人である。
数年は顔を合わせていないなんとも懐かしい面々であり、林に至っては１０年ぶりの再会である。
塚田と間宮、そして私を加えれば、あの悪名高き独身貴族円卓会議のメンバーそろい踏みと言えた。

え？あのメンバー勢ぞろい？

思考の渦に飲み込まれ巻き込まれる私を尻目に、その集団は挨拶もそこそこにドカドカと我が家に乱入した。
家主である私が了解を出していないのに、である。
そして私がゲームをしている居間へ入って行き、ガサガサとビニール袋を広げるような音を立てた。

奥から間宮の声で「あーそうそう。あとは塚田がきたら10年ぶりの円卓会議始めるから！」と聞こえたので、思考を巡らせる。

とりあえず塚田は生きているようで安心した。
なんだやはり生きているのではないか、心配して損をした。
貴様は本当に心配していたか？と問われれば、少し弁明させていただく時間を頂きたい。

と、同時に様々な疑問がわきあがった。
しかしなぜ家主の私に断りもなく私の家で円卓会議を行うのか。
以前の化け猫もそうであるが、家主の尊厳なんぞ砂上の楼閣なのであろうか。
なんで私ばかりがそうなのか。
これは世間の常識なんであろうか。
そもそも主催したのは誰か。おそらく塚田だ。秘密にしたいがため、電話に出なかったに違いない。
いつそんなことが決まったのか。
それにしても、私のあずかり知らぬところで、私を巻き込むな。
一応一言断りを入れろ。

考えを巡らせる私の鼻を牛丼の匂いが撫で、私の思考は牛丼一色、肉一色となった。
なによりも今は、目の前の牛丼である。

独身貴族円卓会議について記す。

世間一般での独身貴族とは「独身で気ままに暮らしている人」を指すと思われる。
最近はあまり耳にしない所を見ると、おそらく死語なのであろう。
しかし我々仲間内でいうところの独身貴族とは「独身で気ままに暮らしている人」ではなく、「彼女が欲しいのに出来ない人」のことを指す。

例えば、私、塚田、眼前の間宮、林、中村、片岡、加藤、そんなもてない男達がここで言う独身貴族である。

この呼び名は我々が高校生の時に思いつき、おおよそ１５年を誇る無駄に歴史のある呼称なのである。

当初はモテナイ男たちである我々が、自分自身に発破をかけるために自嘲気味に名づけたものだ。
１秒でも早くこの不名誉な称号を外そうと自らに発破をかけるのが目的であったが、１年もすると当初の目的は忘れ去られ、私たちの思考的遊び場へと変貌していった。

しかし15年も昔の高校生時分からモテナイと自負しているのだからたいしたものである。
私達に惜しみない拍手を！！

貴族というからには公爵伯爵など様々な名称の爵位が存在する。
公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵。
明治時代の日本のような階位である。
しかしながらこの独身貴族においては、爵位の名称は意味を成さない。
もともと意味の無い、ただの毒の沼地なのだから当然である。
ちなみに「なんとなくかっこいいから」という理由で伯爵が大人気である。
なお私はただでさえも、もてないというマイノリティに属するのにそこでもマイノリティを気取り、子爵を拝命した。
阿呆かどうかは各自判断されたし。
私は自覚している。

なお、得恋によってこの独身貴族の称号は剥奪されると定められている。
称号剥奪とは大変不名誉な事態であるが、社会的には剥奪されたほうが名誉であることは言うまでも無い。
御伽噺のように亡霊共潜む毒の沼に引きずり込まれた時は、恋人によって窮地を救われるのである。

独身貴族についてはご理解いただけたと思うので、次は、独身貴族円卓会議についてである。

端的に言えば、独身貴族の拝命を受けた私達たちだけを集めた会合が行われる。
それが独身貴族円卓会議である。
ありていにいえば身内の集まりといえる。

誰かがやりたいといえばそれで会議は成立であり、あとは集まるだけである。
集まる場所は同じように誰かが勝手に決める。
そう、それは今回のように独断的に。
なお円卓会議というが、円卓で行ったことはない。
円卓と名前が付いているのは、そのほうがかっこいいから、である。
ふと思ったのであるが、今の世の中、円卓なんぞあるのであろうか？
国連本部以外で見たことなんぞ無いので、どなたか情報をお持ちであればお知らせ願いたい。

話しが脱線したので元に戻す。

さて、単なるモテない奴らの会合と侮ってはいけない。
そこでは腐りきった世の中に対して正義の鉄槌を与えるべく、極めて崇高な話し合いが行われているからである。
ちなみに腐りきった世の中とは恋愛至上主義な現実に対してであり、政治的理念は一切無い。
世にあふれる恋愛至上主義に対して明確に反旗を翻し、独身貴族のあるべき姿を話し合うのである。

会議では議事録もちゃんとつくり、印刷して各自に渡される。
そして各自そっと机の引き出しかゴミ箱にしまうのである。
一切行動に移さず、口外せず、本当にひっそりと行われるのがミソである。
誰にも迷惑をかけぬ、恐ろしく健全な、行動としては不健全かつ非建設的、そしてやたらと内弁慶な会議なのである。

最後に行われたのが今から１０年前、その時に円卓会議の無期限停止が全会一致が可決された。
というのも、二十歳を目前に彼女がいないという理由で集まるのが、あまりにも痛々しくなってきたからである。
自傷行為にも痛みは付きまとうのだ。

さて現実に戻って考えてみれば、やはり謎ばかりである。
なぜ今、またもやこんな痛々しい会議を復活させるのであろうか。
鎌鼬の１件で気でも触れたか、それともやけくそにでもなったのであろうか。
そして、なぜ牛丼には紅しょうがこれほどまでに、合うのであろうか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3340y/

物の怪日和

2011年11月22日01時13分発行